

# 岐阜県揖斐川町小島公民館における世代に応じた居場所が人づくり、地域の土壌づくりにつながる実践—多世代が学び合い、育ち合う地域づくり— 衣斐淳美<sup>1)</sup>・益川浩一<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> 揖斐郡揖斐川町小島公民館（〒501-0633 岐阜県揖斐郡揖斐川町小島 67 番地 1）  
<sup>2)</sup> 岐阜大学地域協学センター（〒501-1193 岐阜市柳戸 1 番 1）

## 1. はじめに

揖斐川町小島地区は、人口 3,658 人、世帯数 1,376 世帯の地域であり、地区にある小島小学校の児童数は 161 人である<sup>1)</sup>。小島公民館では、2021 年 4 月に小島コミュニティセンターが竣工され、新しい施設での公民館活動、地域づくりがスタートしている。この施設の建設が始まる 3 年程前から、住民が新しい拠点づくりに向けた全世帯アンケートやワークショップを開催し、未来の小島に向けた拠点づくりに力を注いできたという経緯がある。

小島公民館の体制についてもふれておきたい。正規の職員はいない。いずれも非常勤の館長、主事、管理人の 3 人で構成されている。恵まれた職員体制であるか？と言われれば、決してそうとは言えない。この体制は、筆者（衣斐）が公民館主事に就いた 32 年前から変わっていない。しかし、人や資金がないことを公民館活動ができない理由にしてはならないと考えられている。

## 2. 公民館のあり方が変わってきている

図 1 は、我が国の人口の推移で、2004 年をピークに急降下している。誰もが経験したことの無い人口減少の時代に入り、公民館を取り巻く環境、社会構造、住民意識などが大きく変化してきている。公民館を生涯学習の場としてのみ捉えるのではなく、公民館には、新たに、日々の暮らしや福祉、防災などの地域課題に応えられるような機能が必要とされている。

また、公民館が個々の学ぶ場としての役割を果たすとともに、個々の学びの成果である知識、技術、経験を地域のために活かすことが求められている。

小島地区でも、公民館（コミュニティセンター）建設という大きな節目を迎え、この地域の拠点づくりと向き合う中で、住民の意識の変容が見られた。

## 3. 地域の拠点づくり

新しい拠点をすることは、地域の未来を描く一歩につながる。公民館では、この好機をどのように活かすかが重要である。地域の拠点は、これから 20 年 30 年先、子どもたちが大人になる頃はもちろんのこと、その先の次世代にまで必要とされる場でなければならない。「こんな地域にしたい、こんな活動がしたい、そのためにこんな施設が欲しい」。その思いを軸に、住民がどんな小島の未来像を描くか、考えることの大切さが話し合われた。できるだけ大勢の方に関心をもってもらうためにも、まずは、全世帯アンケートが実施された。その結果、小島地区全世帯の 64%にあたる 828 件の回答を得ることができた。アンケートの項目は、どのような目的で利用したいか？どのような拠点になると良いか？など、ハード的な要望だけではなく、新しい拠点でやってみたい事など、個々が未来の小島に向けて、考えられるように問いが設定された。また、アンケートをもとに、5 回のワークショップが開催され、未来への想いを対話の中で深めていった。

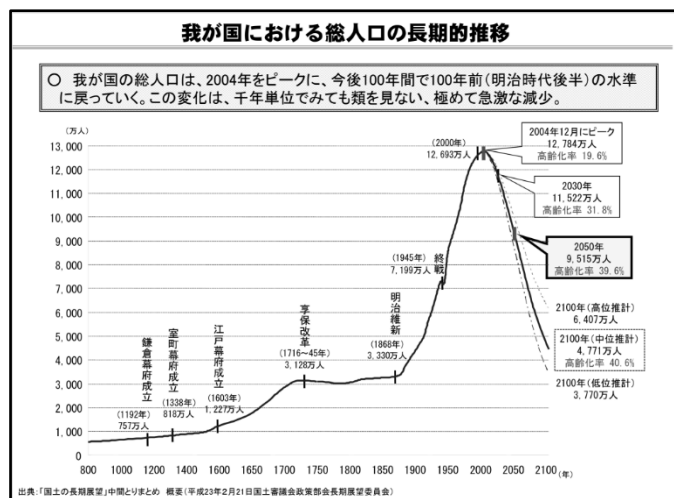


図 1 人口の長期的推移（「国土の長期展望 中間とりまとめ」（平成 23 年 2 月国土審議会政策部会長長期展望委員会）から作成）



写真 1 ワークショップの様子①

この結果、ハード的には、高齢になっても使いやすい平屋、子どもの遊び場、授乳室、多目的に使えるテラス、土足での運用、気軽なミーティングができるキッチンなど、数多くの想いが反映された。また、福祉、防災、若者、子育ての拠点としても具体的な意見が寄せられた。拠点施設がオープンしてからも、「やってみたいタネみつけ」を募集し、やりたい事が叶えられる場として活用が進んできた。公民館ではやってみたい声が沸々と湧いてくるような呼びかけをしたり、やりたい人がそれを実現できるように伴走をしたりしている。やってみたいことを叶えた例として、ボサノバナイト、みんなのコンサートがある。いずれもコロナ禍ではあったが、100名を超える方が来場し、主催者側も参加者側も大変貴重な時間となった。ボサノバナイトは、ブラジルから実家に帰国中の女性が、地域の皆さんに、ブラジルの文化や音楽を紹介したいという思いから開催された。みんなのコンサートでは、コロナ禍で演奏する機会をなくしていた中学生吹奏楽部の保護者の声を受けて、同じく発表の場を無くしていた地域の音楽愛好者の皆さんが合同でコンサートを開催した。新しい拠点は、自分たちの想いが詰まった施設であり、やりたい事が実現できる文字通り“自分たちの施設”になっている。

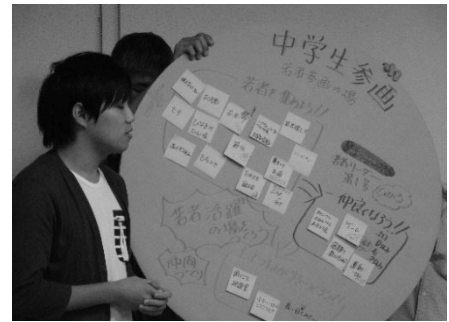


写真2 ワークショップの様子②



写真3 やってみたいタネみつけ



写真4 ボサノバナイト



写真5 みんなのコンサート

#### 4. 地域の仲間を増やす

予算もない、人もいない、しかしながら、やりたい事、やるべき事が山積みの公民館の事業や課題解決への取組みは、地域の仲間の参画で実現している。公民館活動の基盤となる企画委員10名が、様々な活動の関わりの中で、図2のような、キラリと光る人材（仲間）に頼ることで、つながりが出来ていく。それぞれの得意を活かして活動していくことで、仲間となってくれている。

例えば、25年あまり続く未就園児親子を対象とした「幼児教育学級」（後述）には、学級に参加していた保護者が、学級の卒業と同時に運営側にまわり、若いママたちのサポートをしている。企画を提案したり、先輩ママとしてのアドバイスをしたり、彼女らは子どもが幼稚園に入園してからもこの学級に通いたいという思いが強く、学級の雰囲気が好きで楽しみながらママや学級を支えてくれている。

高校生チームは、中学生時代に夏祭り（後述）リーダーを経験した仲間が、高校生になってからも、夏祭りをはじめ地域のイベントに参加している。パソコンや音響が得意な子は高齢者向けのスマホ教室の講師を務めたり、舞台関係のサポートをしたり、絵を描くことが得意な子は地域のオリジナルTシャツのデザインをしたり、司会が得意だったり、仲間を集めることが得意だったり、自分の関心のある事で地域の活動の「サポーター」として大人との関わりを楽しんでいる。

実践・活躍の場としての公民館（拠点）で各事業への参加を通じて、運営側に興味を持ったり、仲間と一緒に活動する楽しさを見出したり、それぞれがつながりをつくり、仲間が自然に広がってきている。このつながりこそが、小島公民館の強みである。

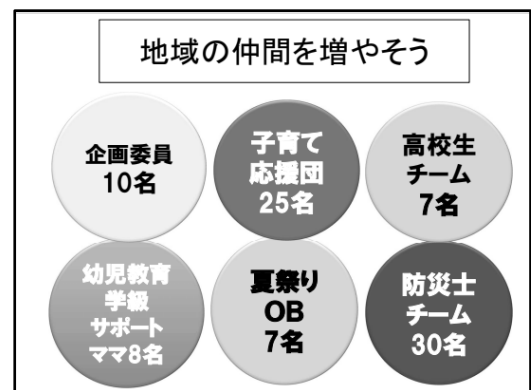


図2 地域の仲間を増やす



写真6 子育て応援団



写真7 学級OBによる運営



写真8 高校生によるスマホ教室

## 5. 土壌づくり（人づくり）

公民館は、地域の土壌づくりをする実践の場であると考えられる。地域の土壌は「人」であり、目的意識的に“人づくり”をしていく必要がある。図3は、大人になるには、「まわり」との関わり方を年齢に応じて段階的に学ぶことが重要であるという大正大学・浦崎太郎の提言を基に作成した「発達段階に応じた居場所」である。公民館では、これを実現するため、それぞれの年代に応じた居場所を設けている。

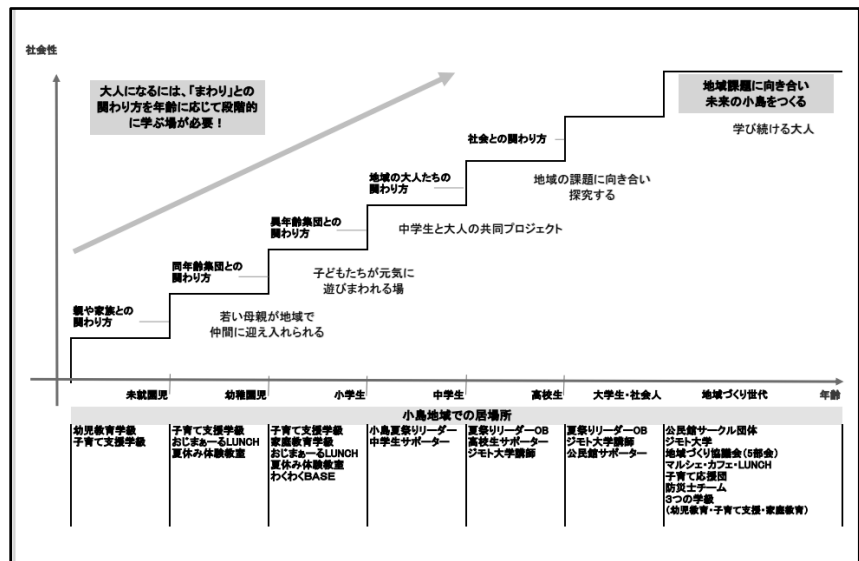


図3 発達段階に応じた居場所（筆者作成）

公民館が、学びの成果を披露・実践する場であれば、地域の中での関わりや役割を感じ、学び続けるきっかけとなる。公民館の運営側は、最上位目標に地域づくりで活躍する人材育成を掲げ、関わる人たちに、公民館という居場所の中で、目的意識的に活躍の場を提供、関わり・つながりを広げ、地域の中での役割を担ってもらいながら、地域への想いを醸成し、よりよい地域となるための活躍の場づくりを進めている。多世代との交流の中で、学び合う関係の中で、学びの楽しさ、学びの成果を活かす楽しさを実感することで、育ち合う関係性を築いていくことができれば、おのずと人づくりにつながり、よりよい地域の土壌づくりへとつながるものと考えられる。

### 若い世代が地域で受け入れられる場

小島公民館では、子育て中の保護者やその子どもを対象とした学級を、3種類、開催している。未就園児親子を対象とした「幼児教育学級」。小学生の保護者を対象とした「家庭教育学級」。幼児小学生親子を対象とした、「子育て支援学級」。それぞれの学級は、子どもや子育てを軸にしてはいるものの、保護者同士のつながりづくりや居場所づくりを目的としている。

「幼児教育学級」では、知り合いもない、縁もゆかりもない土地での不安、さらに子育てそのものに不安を抱えるママに、地域を知ってもらい、仲間づくりをしてもらうことをねらいとしている。「家庭教育学級」では、小学校に入り親同士のつながりが薄れていく中で、興味関心の湧くような企画をたて参加を促し、保護者同士が子育ての悩みを相談できる関係性を築ききっかけにしてほしいと考え、開催されている。

「子育て支援学級」の開催は、「家庭教育学級」に参加していた保護者らが、そこでつながった仲間で「子育て応援団」を立ち上げたことに始まる。子育てが一区切りついた40代50代が、地域の子育て真っ只中の若い世代をサポートしたいという思いで子育て応援団を結成し、学級運営をしている。これは、公民館活動を通じて得たつながりから、地域の課題解決に向けて取り組んだという好事例でもある。

子育て応援団は、自分たちの経験から、あつという間に過ぎ去ってしまう子育てをもっと楽しみながらゆったり過ごして欲しいと願っている。子育て応援団が運営する子育て支援学級では、応援団が、2ヶ月に一度のペースで、様々な親子体験を企画したり、そこで親同士が気軽に話をしたりできるよう、温かい居場所をつくりあげている。

どの学級も段階的に関わる中で、地域での関係性も深まっていく。参加した保護者らは、子育て応援団のように、自分たちで運営することの楽しさも学んでいる。公民館は、それぞれの居場所で、地域で活躍できるキーマンを見つけることができている。



写真9 幼児教育学級



写真10 子育て支援学級

期	開催日	学 習 内 容
1	7月8日 (金) 9:30~12:00	<b>宿屋復興川で、フランス暮らしと食飲ごはん</b> 上南方にある宿屋復興川のご主人は、長年暮らしたフランスからリターンし、古民家を改装しゲストハウスをオープン。フランスでの暮らしや文化について教えてもらうことで、日本のこと、町のことを考えるきっかけにもなります。かまどで炊くごはんは絶品！そんなスペシャルな時間です。 
2	夏休み中 在宅型	<b>家族みんなで取り組む防災①「防災アンケート」</b> あなたの家では、防災に向けて家族で話し合っていますか？防災リュックの中身の確認、備蓄リストの確認、避難経路の確認、防災クッキングなど、どんな題材でもOK！このアンケートをきっかけに、家族で一歩踏み出してみよう。自治体の重要性についても発信していきます。 
3	8月11日 (祝) 山の日 夏休み	<b>おじまーあるカフェ親子ボランティア</b> 8月11日に開催される「おじまーあるカフェ」で、親子でオーダーをとったり、お茶をだしたりするボランティアに参加してみませんか？地域の高齢者の皆さんが、可愛いスタッフさんに喜ぶこと間違いなし、親子で地域の活動に積極的参加してみよう。 
4	10月上旬	<b>小島山登山に親子で挑戦！</b> 小島を見ることができると小島山を親子で登ってみませんか？地域づくり協議会の皆さんがサポートし、ゆっくりと休みながらつべんで登頂してもらえます。登山を親子で楽しみながら、頂上から、故郷を見渡してみよう。感動体験を共有します。 
5	冬休み 在宅型	<b>家族みんなで取り組む防災②「防災クッキング体験シート」</b> 防災クッキングを体験し、いざという時に備えよう。避難生活を考えて、あるもので温かく美味しいものを作ってみよう。体験から学んだことをいかに、持ち出し袋の中も絶品級！ 
6	8月中旬	<b>寄せ植えとトークフォークダンス</b> 多世代交流事業を兼ねて、春の寄せ植えを開催。その際に、地域の方と対話を通じてふれあいます。簡単な歌に替えながら、園の周りに移動。できるだけ多くの方と対話を通じて、同じ地域に住む多世代の皆さんとの交流を楽しむ企画です。 

図4 家庭教育学級年間計画

### 子どもたちが元気に遊びまわれる場

公民館のサークル活動の参加者や地域で仕事をする大人が中心となって、「子どもたちが元気に遊びまわれる場」づくり事業を、夏休みに開催している。

「夏休みわくわくBASE（寺子屋）」では、サークルのメンバーが、子どもたちの夏休みの宿題である書道、ポスターや読書感想文の指導者となっている。「夏休みわくわくBASE（体験）」では、地域で働く大人が講師となり、職業体験講座を開催している。学校で取り組んでいる米作りでは、地域の方の所有している田を学習田として貸し出し、田植え・稲刈りを子どもたちが学ぶことができるようサポートしている。子どもたちは、地域の大人と直接関わり、学んでいくことで、地域に支えられていること、地域に育てられていることを実感している。また、子どもたちだけでなく、講師を務めた大人自身も、子どもたちとの関わりを楽しみにして、自分の得意な事で役にたてるなら嬉しいと振り返る。さらに、公民館は、小学校で「協働のまちづくり」と題した授業を実施している。そこでは、小島地区には、地域のことを考えてくれている頼りになる大人が大勢いて、支え合って地域をつくっていることを伝えている。小島地区には、カッコイイ大人が沢山いると具体的な事例を示すと、子どもたちは誇らしげに、目を輝かせているのが分かる。その際、大人の話だけでなく、子どもたち自身にも、地域を意識してもらい、今、出来ることを子どもたちの対話によって深めてもらっている。



写真11 わくわくBASE



写真12 藁布団を満喫



写真13 「協働のまちづくり」授業

## 中学生と大人の共同プロジェクト

小島の「文化」と言われる「小島夏祭り」。中学生が企画運営をイチから創り上げ担うことが伝統となっている。毎年中学生リーダーを募り、夏休みに開催する祭り当日に向け、地域の人と一緒になって必死に考え、プロジェクトを創り上げる楽しさや難しさを学んでいる。コロナ禍を経て、4年ぶりに開催された小島夏祭り 2023 は、中学生リーダー52名により、2ヵ月余りの間で企画検討され、開催された。夏祭りのメインは、踊りであるため、本場の郡上踊りに出向き、現場で体験・体感し、そのワクワク感を小島の夏祭りで表現できるよう、踊りの練習会や地域へのPRを中学生自らが行っている。本物を知り、五感で感じたものを伝え、広げていくという、学びの原点となる活動を実践する。その中心にあるのは、地域で伝統となっている先輩が築き上げてきた活動を受け継ぎ、さらに良いものにしていくという向上心である。また、何のために誰のために開催するのか、地域のため、地域の人に喜んで参加してもらえるためという目的をもって実践されている。そうした思いから、アトラクションで参加者を楽しませるよさこいを企画し、練習を重ねて当日に発表された。こうした活動を、卒業した高校生や大学生が支えている。地域の大人たちは、夏休みが近付くと、この中学生らの活躍を目の当たりにする。中学生一人ひとりが自分の想いを地域の寄合いや集会に出向き、自分の言葉で伝えていくからである。また、20年も続くことで、夏祭りリーダーの経験者は、のべ589人にのぼっている。このため、地域全体で中学生を応援し、支える土壌ができていく。地域全体に、中学生が活躍しやすい雰囲気醸成されていき、中学生が成功体験をしやすい環境づくりにつながっている。

中学生らにとって、夏祭りはやりたいことを実現する主体性や自己肯定感を育む場、地域の大人との関わり方を学ぶ場となっている。この経験こそが、大人になった時に、地域を想う心や地域のことを自分事として考えられる人づくりにつながっている。



写真 14 夏祭りに向けて



写真 15 夏祭りの様子



写真 16 夏祭りフィナーレ

## 6. 土壌づくり（大人の活躍の場づくり）

最上位目標を地域づくりとしている活動の中での、地域の土壌には複数の段階があると考えられる。まず、地域の土壌には、公民館を活動の場とするサークル活動が挙げられる。ハードルを低くし、参加しやすく、広く多くの人びとが参加し、公民館と関わりをもってもらおうという“活動人口”を増やす取組みである。

そこに、さらに一步踏み込んだ、地域づくりに具体的に取り組む活動となると、別の土壌・活躍の場が必要となる。それは、公民館、学校、家庭、地域、会社など個人がこれまでに関わってきた組織や団体、社会などの中で学び、蓄積してきた経験などをさらに別の場所で活かし、広げる活動を可能とする場所・活動である。そのような公民館活動の最上位目標に地域づくりを付け加えた上で、各個々人の喜びや幸せの実現も公民館活動の目標であると意識して取り組むことで、個人にも影響を与えることになる。自分自身が得てきた学びや経験を他者に分かち伝える場があることで、マズローの欲求5段階説<sup>2)</sup>でいうところの自己実現や自己超越を目指す取組みとなり、社会や地域で自分自身の活動で地域を良くする活動を実践することで、地域に必要とされる活動が個人の人生の中での最上位目標となるような場所・活動となることを目指す必要がある。つまり、人づくりの土壌で培われた知識や経験を活かす場としての地域（地域づくり）を活動の場所とし、活動を継続する中で、人生を豊かにする取組みを進めていくことへとつながるような仕掛けづくりをしていく必要がある。

公民館として、地域づくりを通し、地域の課題を解決する人づくりを進め、地域の関係性を向上させるとともに、関わる人たちの存在意義・欲求、豊かな心を育む活動へとつなげていく必要がある。この活動の継続の後に、最終型として個人としても公民館としても地域としても Well-being<sup>3)</sup> の向上につながるようになる。

小島地区では、地域の拠点をつくる好機の中なかで、地域に関心をもってもらうきっかけができた。次は、自分自身で地域を良くする経験を積む、地域の仲間と想いを共有することで、地域に関わってよかった、楽しい、よりよい地域にしていきたいと実感できるのではないかと、地域づくりの実践の場として、「地域づくり協議会」の立ち上げに向かっていく。次に拠点づくりからスタートし、どのように地域づくり協議会を立ち上げていったのかを紹介する。

### 地域づくり協議会が立ち上がるまで

10年程前、全国には地域運営組織を立ち上げ、自分たちの地域の課題を見つけ、知恵を出し合い、汗をかく、そんな地域づくりに取り組む地域が出てきていた。大人の活躍できる場がこれであり、地域運営組織の立ち上げは、人口減少が進む中、一刻も早く取り組むべき喫緊の課題であると認識された。公民館関係者が、先進地である富山県氷見市、島根県雲南市、山口県光市、徳島県神山町など、全国に出かけ現地視察を行った。そして小島地区の区長や揖斐川町の職員に、その思いを伝えた。

そして、拠点づくりで地域の方向性が見えたところ、この拠点をより有効に活かすためにも、地域づくり協議会を立ち上げていこうという機運が高まっていた。地域づくり協議会設立の準備会を立ち上げるために、区長会、公民館、各種団体のメンバーで、「なぜ、地域づくりが必要なのか？」をテーマに勉強会が6回開催された。勉強会では、行政職員から、福祉、防災、子育て支援、地域創生、人口減少など、自分たちの知らなかった分野の話を経験者に基づいて具体的に話してもらい、学びを深めることができた。この勉強会を6回開催し、回を重ねていくうちに、なぜ今、地域づくりが必要なのか？地域の課題はなんだろう？と、参加者が自分事化できていった。そして、勉強会を始めて約1年後の2020年秋、地域づくり協議会設立に向けての準備会を、地域住民や各種団体、関係者41名で立ち上げることにした。

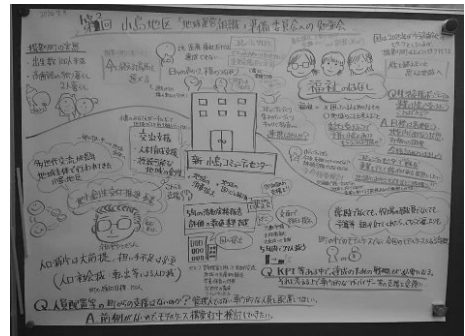


写真 17 勉強会の記録

小島地域づくり協議会準備会 部会ごとの課題抽出 2020年10月

	人づくり	生きがいづくり	安心づくり	環境づくり	魅力づくり
方針	次世代の担い手を地域の大人みんなで育てる地域づくり	ずっと住みたいと思う、美しく誇れる地域づくり	地域みんなで支えあう、安心安全な地域づくり	ずっと住みたいと思う、美しく誇れる地域づくり	地域資源、伝統文化を活かした魅力あふれる地域づくり
柱	生涯学習(学びづくり) 担い手育成づくり 増活支援 地域づくり勉強会 人材育成	幼児教育学級 家庭教育学級 子育て支援 介護予防 高齢者の社会参加 生活支援(通院や買い物) 野菜直売	防災計画 健康づくり 水道検診と見守り	鳥獣害対策 多面的機能維持管理 ホテルの里保存活動 55歳からの農業学校 ごみ対策	伝統文化継承 歴史伝承 特産品の強化(小島米など) 起業支援 空き家対策 コミュニティスペース ミズベリング(粕川、朝鳥、揖斐川)
具体的な事業	生涯学習(学びづくり) ・サークル活動の推進 ・地域づくりの勉強会  担い手づくり ・小島夏祭り(中高生の場) ・コミセンに中高生の居場所  学校協働活動 コミュニティスクールの実践 学習田の活用  地域づくり勉強会  増活事業 ・お節おじさんおばさんの登録 ・ご縁結び  公民館活動推進員 公民館企画委員 小中学校 PTA	家庭教育学級 幼児教育学級  放課後児童教室  コミセンでのカフェ 子育てサロン おじまマルシェ  高齢者の認知予防 生き生き体操教室  玄関から玄関へデマンドタクシー  有償生活支援 野菜販売、憩いの場  福祉委員 学級スタッフ 民生児童委員	小島地区防災計画 ・災害時の対応(情報収集・伝達、避難、応急活動)をフローで記載 災害時の支え合い  健康づくりの支援 ・健診の啓発 ・誰もがができる運動の推進 ノルディックウォーキングの普及  水道検診と見守り ・2か月毎の水道検針の際にひとり家族の見守りを実施する  保健推進員 消防団 区長 防災士	鳥獣害対策 ・狩猟免許の取得  多面的機能維持管理 ・状況調査と管理運営 ・耕作放棄地対策 ・55歳からの農業学校  ホテルの里保存活動  ごみ対策 ・拠点回収	伝統文化継承 ・白檜おどり、黒田神楽  歴史伝承(瑞巖寺、白檜城ほか) 特産品の強化(小島米、徳山ななば)  起業支援  空き家対策 ・空き家調査、バンク  ミズベリング ・粕川アウトキャンプ場 ・市場バターゴルフ場 ・朝鳥公園、カヌー場  コミュニティセンター祭り

図 5 準備会での部会づくり

準備会では、最初に、未来に向けたビジョンを掲げた。そして、その描いた未来像に向けて、バックキャスト的に、現状に何が足りないのかを考え、課題を出し合う。その課題を5つの分野にわけ、部会を作り、準備会のメンバーが自分の取り組みたい事業、部会にわかれ、そこからは部会ごとで事業計画を練り、深めていく。当時は、コロナ禍で何度も会が中止されるなど、大変不安定な状況であったが、ゆっくり進めたことで、逆にどの部会もエンジンが温まり、やりたい思いを募らせていく事ができた。やる気は十分であったが、まだまだ課題は山積の状態であったが、どの部会も、すぐにやれること、長い時間をかけて積み上げていくことなどを検討し、できることから一步一步やっけていこうと前を見続けることができた。

そして、一年余りの間に13回の準備会を経て、2021年11月に地域づくり協議会が設立された。協議会ができたことで、地域で大人が活躍できる場が整ったわけである。協議会が立ち上がり、2年余り、5つの部会は、資金がない中ではあるが、それぞれの描いた未来像の実現に向けて、できることを一步一步進めている現状である。次に、2部会の活動を紹介する。

### 生きがいつくり部会

生きがいつくり部会は、地域の住民がいつまでも生き生きと安心して暮らすことを目的として、大きく2つの事業を展開している。

1つ目は、多世代の憩いの場づくりである。新しい拠点で開催する「おじまあーるカフェ」は、月1回開催される。誰が参加してもよく、事前の申込みの必要はない。好きなテーブルに座り、好きな飲み物をオーダーする。茶菓子と手作りのスイーツや季節の果物などが、飲み物と一緒に配られる。会の後半になると、その月のスペシャルゲストが登場し、演奏をしたり、講演をしたり、楽しい学びの時間となる。この部分を公民館が担当し、地域に根差した時間になるように、企画を組み立てている。詩吟、リズムダンスの指導者、落語家、着物収集者、移住者、消防士、校長先生、警察官など、多様で多彩な人がゲスト講師として登場する。特に公民館を利用する団体の皆さんには練習の成果を発表する場として活用してもらい、活動の励みにもなっている。



写真18 おじまあーるカフェ

2つ目に、「おじまあーるマルシェ」は、コロナ禍にスタートした事業である。2ヶ月に一度開催され、4時間あまりに800人を超える方がやってくる。小島地区の特徴で、特に若い世代がファミリーで参加し、リピーターが多い。地域で野菜や果物を作ったり、鞆やアクセサリ、多肉植物の寄せ植えなどをハンドメイドしたり、今まで趣味の域で留まっていた人たちが、一歩前に進み、マルシェで出店している。出店する人たちは、この機会を得て、作る楽しみ、地域の方に喜んでもらうという生きがいつくりにつながっている。

これらの企画運営をしているのが、生きがいつくり部会に所属する、区長や公民館企画委員、民生委員、福祉委員、幼児教育学級スタッフとなる。彼らは、いずれも経験のない分野ではあるが、近隣の海市や近くの道の駅で開催されるマルシェ、美濃加茂市で開催される賑わいのあるサロンにも出かけ、その運営方法を自主的に学んで、カフェやマルシェの実施に生かしている。



写真19 おじまあーるマルシェ

### 人づくり部会

人づくり部会は、次世代の担い手を地域みんなで育てることを目的とし、大きく3つの活動を進めている。1つ目は子どもたちを対象にした「学校支援事業」、2つ目は中学生、高校生を対象とした「地域リーダー育成事業」、3つ目は独身者を対象とした「婚活支援事業」である。

学校支援事業として、令和4年度、小学校とタッグをくみ、人材バンクにあたる小島小応援団を募集した。地域の住民が、趣味の囲碁や踊り、学校の花や野菜作り、学習田での共同作業、読み聞かせ、伝統芸能の伝承など、自分の得意を活かして、子どもの学びや学校をサポートするための応援団である。15項目にのべ50人の申込みがあり、人づくり部会が学校とのパイプ役とな

って活動をする。コミュニティ・スクール等の導入がなされていない地域ではあるが、組織がなくとも子どもや地域にとって有益なことを人づくり部会が中心となって進めている。

2つ目の地域リーダー育成事業は、公民館事業としてだけでなく、人づくり部会も、一緒に支えている。

3つ目の婚活支援事業は、協議会を立ち上げる勉強会の中で、少子化が大きな課題であることが明らかとなり、小島地区では結婚を希望する方がいても、出会いがない、婚活に向けてのサポートが少ないという切実な声が聞こえてくる中、人づくり部会では、婚活も人づくりの大事な課題であると認識し、地域の中に、婚活や恋活を応援するお節介さんを募集することからスタートした。集まった14人で恋活倶楽部を立ち上げ、婚活事業にも力を入れている。春には、プレイベントでBBQを開催した。多くの期待を背負いながら、必要とされる事業として、ますます力が入っている。人づくり部会を構成するのは、区長、学校長、PTA、公民館企画委員、学習田関係者である。

5つの部会が、地域で関わる「同志（仲間）」を増やしている。現在、5部会の部会員は、60名を超えている。それとは別に、部会の中に、小島小応援団や恋活倶楽部などの団体が作られ、関わる人の輪を広げている。



写真 20 学校整備（地図の池）



写真 21 伝統芸能の伝承



写真 22 恋活プレイベント

## 7. 地域や多世代をつなぐ活動

図6にあるように、多世代のつながる場を整理してみる。

ママ目線で見ると、幼児教育学級で地域の仲間入りをし、家庭教育学級では、地域に根差した活動をすることで、仲間づくりだけでなく、地域の課題にも触れる（防災やボランティア等）。家庭教育学級を卒業し子育てに一区切りがついた保護者らは、地域課題である子育て支援に目を向ける。そして仲間子育て応援団を立ち上げ、サポートする側にまわり、子育て支援学級を立ち上げていった。その先に、自分の得意を活かした地域づくりがあり、居場所づくりが続いている。

併せて、子どもの目線で見ると、小島地区には、保護者に連れられて参加する幼児教育学級や子育て支援学級があり、子どもたちは、幼い頃から公民館活動に参加するハードルが低くなっている。学級等に参加していなくても、長期休暇に開催されるわくわくBASE、防災キャンプ（後述）など、子ども自身を対象にした多くの事業があり、公民館にやってきて体験を重ね、他の学年や地域の人との関わりをもちながら育っていく。そして中学生になると、小島の「文化」と言える「小島夏祭り」に出会う。小島夏祭りは、子ども中心の活動の最終型となっており、

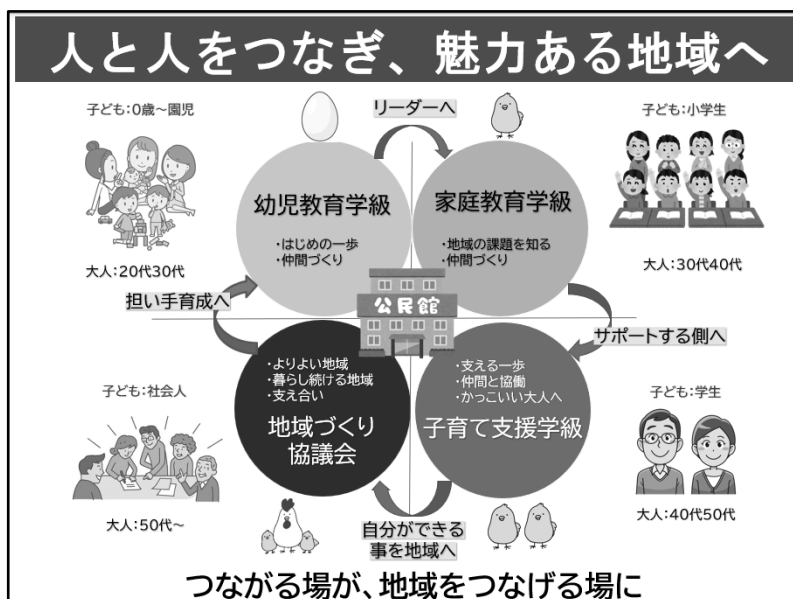


図6 多世代がつながる場づくり



子どもの地域での活躍と成功体験を創出できる場になっていると言える。

様々な活動を長年続けていったことで、関わってきた子どもが中学生となり、中学生リーダーが、保護者になり学級への参加者にもなっていく。「人のつながりと活動のつながり」が、公民館という場における地域の人づくりの土壌であったことに気付く。人をつなぎ、活動をつなぎ、世代をつないでいく複合的な活動が地域として展開されていくのである。

様々な活動を続け、繰り返していく中で、参加者の反応などから、地域や多世代をつなげる公民館活動を意図的、目的意識的に実施していく必要があることに気づいたのである。それぞれの活動は、公民館活動としてやらなければならない取組みである場合もあるが、開催の目的、参加者の課題意識、興味・関心事なども十分に意識することが重要である。往々にして、活動を開催すること自体が目的になりがちであるが、活動を実施する意味・価値を汲んだ上で開催すると、必然的に様々なものを多様につなぐ活動を実施することとなる。最後に、公民館が意図的、目的意識的に取り組んだ多世代をつなぐ活動を紹介する。



写真 23 防災キャンプ



写真 24 小島敬老会



写真 25 幼児教育学級と  
高齢者サロンを一緒に

### 防災キャンプ

防災キャンプの対象は、小学生の親子であるが、2日間（一泊二日）のプログラムに、どれだけ地域の方に参画してもらうかがポイントとなる。地域の団体に、コーナーを受け持ってもらい、それぞれの企画運営をお願いする。家庭教育学級の皆さんには、卵のからを持ち寄ってもらい、災害時に素足で歩くことの怖さを体感する体験活動ブースを担当してもらい、区長会の皆さんには、防災倉庫の中を紹介してもらい、何が入っているかというより、実際これだけしか入っていないこと、自分で準備することの大切さを話してもらい、消防団の皆さんからは、増水時足元が見えない中を避難する難しさを水田を歩くことで体験させてもらい、早めの避難の大切さを教えてもらう。防災士の皆さんには、一泊二日のプログラム全体の運営に加え、体育館で段ボールを使つての避難所作り、防災クッキングとして、ビニール袋を使つての夕食（カレーやスープ）作り、牛乳パックを使つての朝食（ホットドック）作りなどを教えてもらう。

防災キャンプの対象は、小学生親子であるが、地域の多様な団体に関わってもらい、その方たちも多くの学びが得られたこと、地域の子もたちと関わりをもってもらえたことが大きな成果である。

### 小島敬老会

小島の敬老会は、毎年体育館いっぱいの180人が参加、年々参加者が増えている。この敬老会も園児から70代までの約150人が一緒になって作り上げている。敬老会のテーマは、「おしゃべり」である。参加いただいたおじいちゃん、おばあちゃんに、テーブルに同席した中学生がどんどん質問し、たくさんのお話をしてもらい、地域みんなが、人生の先輩方に感謝し、楽しもうという雰囲気が心地よい時間となっている。

### 幼児教育学級と高齢者サロンの同日開催

わざわざ大きなイベントを新たに開催する必要はない。“あるもの活かし”<sup>4)</sup>の発想である。例年、計画時に、高齢者のサロンの開催日に、幼児教育学級実施日を重ねるようにしている。クリスマスカードの交換や一緒に写真を撮るだけであるが、高齢者、幼児、保護者ともとても楽しみにされているのが伝わってくる。この集合写真を年賀状にして高齢者の皆さんに送っているが、この年賀状が届くと、家族に誇らしげに見せているという声も聞かれた。

実は、幼児教育学級に参加するママたちには、高齢者の皆さんのそんな声も事前に届けている。ママたちは、地域課題に向きあっているという明確な意識はないかもしれないが、高齢者への優しい声かけや、子どもと高齢者のふれあいを大切にする様子に、高齢化と多世代のつながりづくりという地域課題に無意識に向き合っている姿が垣間見える。こうした事例が多世代をつなぎ、地域をあたたかい雰囲気に行っていると考えられる。

## 8. おわりに ～人と人をつなぎ育ち合う地域へ～

時代背景とともに、公民館活動の役割は変化してきた。人口減少により、地域の課題が変化する中で、小学校区単位の地域の課題が多様化してきた。これを受け、国としても地域ごとで組織された活動により地域を支える必要があると認識されるようになった。時を同じくして、小島公民館建て替えの話があがり、地域として必要なコミュニセンタへの機能移行を目指し、地域として必要な活動拠点を作り上げていく取組みの中で、地域づくりを公民館の最上位目標と位置づけ、様々な活動の意義・目的を整理し、自発的な取組み・事業としての実践へと変化させていくこととなった。コロナ禍も経験し、コミュニティセンター建設、地域づくり協議会設立を経て、地域の課題、やるべきこと、自分たちでできること、今からはじめなければならないことなど、取組みに対し、学び、意識を高めたことで、地域を自分たちで作らば、学び続ける必要があることを認識し、組織として取り組む土壌ができてきた。結果、教室、サークルで培った力や学びの成果を活かす、話し合いに参加している人たちの得意分野を活かす機会・場づくり、人をつなぐことで、様々な課題を解決する実践が具体的に進むこととなった。

時代により、環境により、地域の、人の、課題や目的、やるべきこと、できることは大小緩急様々に変化し続ける。その状況を的確に捉え、適切なタイミングで、先を見据えて人と関わり続け、頼り頼られる活動を続け、新たな解決策などを学び続けることで、よりよい人づくり、地域づくりが進むこととなる。

学び合う、育ち合う関係を紡ぎ、公民館・地域という活動の場で継続的な実践をし続けること、そして、生き生きと暮らし続けられる地域づくりを目指す上で、公民館の役割は大きい。

注)

- 1) 本稿の内容は、揖斐川町及び小島公民館の各種資料に基づいて構成されている。
- 2) 人間の欲求を5つの段階に分けて説明したもの。生理的欲求、安全の欲求、社会的欲求、承認欲求、自己実現の欲求に加え、自我を超えて他者や社会のことを想う自己超越欲求が提示されている。
- 3) 広義には、身体・精神・社会との関わりが持続的に良好な状態であることを意味する。
- 4) 各種講演会・研修会等における益川浩一の指導。